
俺（私）の小さな世界

アリスと蔵と

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺（私）の小さな世界

【Nコード】

N3655I

【作者名】

アリスと蔵と

【あらすじ】

誰もが持つっている自分だけの世界。でもその世界は本当に自分だけの物なのだろうか。答えがあるかも判らない、それでも答えを探し続ける。そんな物語。アナタの世界は誰のモノ？

俺って短気？（前書き）

始めまして！

前書きまで来てくれてありがとうございます（笑）

気に入って頂けるかどうかわかりませんが、もし気に入って頂けたら最後までお付き合い頂けると嬉しいです。（そこまで更新は早くないですが）

もし、アドバースや感想などありましたら、是非お聞かせください。あんまり酷評されると泣いちゃうかもしれないので、程ほどで御願います（苦笑）

それでは、末永く付き合ってくださいる事を願って。

俺って短気？

「はい！じゃあ次はシヨウ君とココロちゃんのラブラブショットで行こうか！」

「ういっす」

ものすっごい適当な返事をしてカメラマンの前に立つ。
こんな適当な返事でも怒られないって、楽でいいよなあ。

「ラブラブだつてさ、軽くチューでもしちゃう？」

んな事言いながら唇を突き出してくるコイツはココロ。
コイツとは良くペアで表紙を飾ることが多い。

って訳で必然的に一緒に仕事をする機会が多くなるわけだが……ハ
ツキリ言って嫌い。

子供が欲しいオモチャをねだるときにやる

「やだやだ！アレ買ってアレ買って！」と地面に寝っ転がって手足
をバタバタさせるアレを

「やだやだ！コイツ嫌いコイツ嫌い！」と台詞を変えてやってしま
いたい程嫌い。

うまく伝わってるか判らないけど、相当嫌いつて事。

理由は沢山あってどれから言えばいいのやらだが。一番はあのメチ
ヤクチャメツチャクチャ濃い化粧だな。

いくらCGで加工してナチュラルに見せれるからって、厚化粧にも
程がある。

そう、まさしくお化け屋敷でバイトでもしてそんな勢いだ。
って言うか本当に勧めてみようか？

「なあ、ココロ。お前に耳寄りな仕事の話があるんだが…」

「ん？ナニナニ？どんな素敵な仕事？」

とても可愛らしく（世間様から見たら）首を傾げながら頭にハテナマークを出している。

つうか唇引っ込めるよ。キモいんだよ。

とは思っても口に出さない俺。ちよー大人。

「峰不二Qハイランドのお化け屋敷は知ってるか？」

「あのバリ怖って有名なヤツだよね？知ってるけど行ったこと無いよ？」

峰不二Qハイランドには日本でトップクラスのジェットコースターと、これまた同じくらい有名なお化け屋敷がある。

ジェットコースターは誰が乗っても吐くと言われてるが、お化け屋敷は誰が入っても憑くと言われる程にクオリティが高い。

本物じゃないのかってくらいにリアルで有名だ。

とゆーか、本物が居るって説も出てきたりしてるんだが、その話をしだしたら長くなりそうなので割愛。

「あそこが実は、この夏が終わるまで従業員を必死に探してるらしいんだ」

「え、それって私にお化けをやってこと？」

ちよつと驚いた風のココロ君。

驚く理由が判らなくて俺が驚くじゃんか。

「冗談ヤメテヨー。私みたいな可愛い子がお化けなんて無理だつて！！」

「ハハツ。冗談だよ冗談。ココロが居たら、お化けに驚く以上にあまりの可愛さで腰抜かしちゃうよな（テメエなんか特殊メイクなしで十分化け物顔だつつうの。客が来たら90%以上が失神するに決まってるんだろ）」

読者様の為に副音声も交えております。

副音声には多分に【毒】が入ってる場合があるので、気を付けちゃいなよ？

イミフな説明終了。

べ、べつにあんたの為に副音声付けてるんじゃないんだからね！
ってこれもう古いか？

「2人ともいいねえ！そのまま目線コツチでキスとかお願いできる？」

って嘘だろ！？

んな化け物とキスなんて出来るわけないだろっ

「ほっぺでいつすか？（テメエ、俺を殺す気か！？）」

「細かいことは任すよ。2人の雰囲気好きにやって」

残念ながら俺の副音声は聞こえてないみたいだ。
聞こえてたらそれもそれで問題になるけどな。

「ねえねえ、ホントにチューしちゃおうよ」

ぜってえ言つと思つたし！
ざけんなボケ、誰がするかよ。

「んじゃ俺が正面向いてるから、肩に手置いてほつぺたにキスする
感じでどう？（ホントは頬ですら死にたくなるんだからな！？あり
がたく思えよ！てめえにはあそこに居るカメアシの田村がお似合い
なんだよ）」

【カメアシ（カメラアシスタント）の田村。本名：田村勇氣。年齢
19歳。乙女座。見た目はドカ○ンの山田を想像してもらえると判
りやすい。実にソックリだ。年齢を二倍にしても違和感のナイその
姿は、カメアシにも関わらず圧倒的な大物オーラを醸し出している。
だか中身は残念ながら正反对で、名前すらも裏切る引きこもり性格
しかしそのギャップが受けるのか、妙齢の女性には人気がある。残
念ながら玩具的な人気なので、いまだに童貞…たぶん。】
なんかこうやって考えると、田村すら勿体無く感じてくるな。
なんかもう適当な虫とかとキスしてきたらいいよ（投げやり）。

「えーっ」

「な、なんだよ？（もしかして口に出してた？）」

「べつつにいい？唇にしたいなんて思ってないしい」

そうゆう事かよ。

俺の心の叫びが聞こえてたのかと思つたじゃんか。
さすがに聞かれてたら色んな意味で修羅場だったな。

つつか、思ってないなら言っなよム力つくな！

女（法律上人間の女に分類されている）じゃなかったら間違いなく
殴ってるぞ。

まあ男にあんな事言われたら殴る以前にダッシュで逃げるけどな。

「んじゃサツサと終わらせるか」

「オツケ」

あんま触って欲しくないけど、笑顔で我慢だ…。

「ねえ、この後飲みに行こうよ？」

何をトチ狂ってんすか？

せつかくの笑顔が崩れるだろ！

「悪いけど予定あるから」

「えっ！？そうなんだ・・・。空いてると思ってたのに」

そんなに意外そうな顔すんなよ。どんだけ暇人に思われてんだよ俺。予定入ってるのは本当だし。

どっちにしろ入って無くても同じ答えなんだから。

「つーわけだからごめんな。また気が向いたら誘って」

「・・・ちなみに予定って何？」

は！？何訊いちゃってんの？

こーゆー女マジ嫌い。

顔やスタイルがどんなに良くても、詮索してくるような奴は無理。

「んな事訊いてどうすんの？」

ついつい言葉にトゲが出ちゃう。
大人になりきれてないよなあ。

「嫌じゃなければ一緒に行ってもいいかなあって」

アレデス力？

こいつには化粧の厚みでトゲが肌まで届かないみたいなのやつですか？

「・・・そのうちな」

「えーいいじゃん。連れてってよ」

もう無理、我慢できない。

デメエ！と叫ぶ瞬間

「はいオツケー」とカメラマンの声が響いた。

「2人ともお疲れ様」

そう言つて笑顔を見せるカメラマンを見ると、気分が少しだけ落ち着いた。

ナイスカメラマン…なのか邪魔しやがって…なのかは良く判らない。
まあ無用なトラブルは避けれたな。ってくらいか。

「これで今月分のは、一通り終わったかな」

カメラマンの田所が近寄ってきた。

「たぶんそうっすね。暫く田所さんに会えないと思うと泣けてきますよ」

「はいはい。っと、シヨウ君、喧嘩はしたらダメだよ?」

さすがカメラマン。良く見てらっしゃる。

「もしかして、あの時終わらせたのってワザとっすか?」

だとしたらもっと演技の練習しないといけない。

演技の前に短気を直せって感じかも知れないけどな。

「さあ…。それよりも、今日は用事が有るから早く帰りたいんじゃないかったの?」

そっぴや一部のスタッフに伝えてたっけ。

「んじゃ、お先しますよ。皆さんお疲れっした!」

敵に捕まる前にスタジオをダッシュで飛び出す。

プライベートにまであんなのと関わりたくないからな。

微妙に背後を気にしながらタクシーに飛び乗り、目的地へ向かった。

俺って飽き性？

「うーっす」

ちよつとオシャレな看板を横目に店内に突入。

白を基調に作られているのか、明るくて少し目が痛い。
入ってすぐに受付兼レジがある。

その奥の左手にはシャンプー台が二つ。

右手には大きめの鏡と椅子のセットが三つ。

所謂ヘアサロンフットコなんだけど……誰も居ない。

もし俺が客だったら（客なんだけど）帰ってるぞ。

とりあえず適当に中央の椅子に座って暇をつぶす。

どうせ上で寝てるんだろっなあ。

あー…ほんと暇だ。なんか楽しいことないかな。

毎日必死に考えてるんだけど、中々見つからない。

仕事も毎月あるにはあるが、好きでやってるわけじゃないしな。

そろそろやりたいコトってのを見つけないと…。

「すいませーん！」

「うわっ」

目の前に人が来てるのに気付けなかった。

こいつ、もしかや忍者か？

気配を殺す術を身に付けてやがる。

「おぬし、どこの流派じゃ？」

「へっ！？何がですか？」

かなり驚いてるな。

いきなり見抜かれて動揺しているのだろう。

「隠さずとも良い。俺に気配を悟られずにココまで近付くなど、そうそう出来るコトではないぞ」

むっ。何故か笑われている。

動揺し過ぎて壊れてしまったのか？

「何言ってるんですか。あんな半分寝てるような状態なら、誰だって近付けますよ？」

変な人ですねーっ。と最後に付け加えられてしまった。

「さて、冗談は置いて。アンタ誰？」

ビシィっとな音が鳴りそうなイキオイで指をさしてやる。

……無言で指を曲げられた。

尚も指をさす。…曲げられる。指をさす。曲げられる。指を…

「人を指さしちゃダメって教わらなかったんですかっ!？」

あ、結構イラついたみたい。

目つきがきつくなってる。

「んで、アンタ何もんだよ？」

これ以上遊ぶと本気で怒りそうだ。

ってゆーかそんなに睨むなよ!こえーから。

「どうしてもつと柔らかい話し方出来ないんですか？」

どうやら口の利き方に気をつけろってコトらしい。

「何様だ！」

あ……間違つて声に出しちゃった。
まあいつか。

「アナタこそ何様なんですかっ！お客様は神様って教わらなかったんですか！？」

微妙に古くないかソレ。

つつか、もしかしてコイツ勘違いしてないか？

「ああ、すいませんねえ。ちょっと寝ぼけてたみたいで、失礼しました」

ちょっと遊ぶことにした。

寝ぼけてるってレベルじゃなかったよ…とか呟いてる。

面と向かつて言えばいいのに、さっき怒鳴ったおかげでちょっと落ち着いたのか？

「それで神様。今日はどうなさいますか？」

皮肉った【神様】発言にイラつとしたのか、強めに睨んできた。

勿論こっちは営業スマイル。

どんなに睨まれてもニコニコ。

「まあいいです。今日はカラーをお願いしたいんですけど……他にスタイリストさん居ないんですか？」

あんたはやダ的な気持ちを視線で表してくれちゃってます。

「俺一人ですけど？」

そんなに落ち込むなら他の店行けばいいのにつてくらいテンション下がってるよ。

「大丈夫！何とかなるよ」

「そのセリフで余計不安になりましたよ……。他のサロンに行こうかな」

それは許しません。

せつかくの暇潰しを逃がす私ではありませんことよ。

「神様！アナタはとても運がイイ。今日はなんと、カラーが半額のサービスデーなんです」

勿論そんなサービスは存在しない。

どうせやんのも俺だし、適当でいいだろ。

つか、最初の目的を忘れた……。

まあいいか。

「半額っ！？……そこまで御願ひするならやってもらおうかな」

切り替えはやっ！やはり金は強いな。

金を制す者は天下を制す、だっけ？

違う気もするけど、まいっか。

「んじゃ神様。とりあえずシャンプーな」

こつちやこいつで感じてシャンプー台に座らせておく。
意外と素直に従うんでちょっとツマラナイ。

.....。

「ひあつ!？」

「...どうかした？」

「い、今耳に息が...」

「ああ...これだけ近くに居たら仕方ない。シャンプー中は我慢してくれ」

本当に仕方ないと思ったのか、声を出さないように必死で我慢している。

当然ワザと耳を狙って息を吹き掛けているんだけど、これがまた予想以上にイイ反応で笑いを堪えるのに必死な俺。

「あつ...やあ...」

心なしか声が艶つぽくなってきたような...。それに顔も大分赤くなっているし。

結構感じやすい子なんだな。

「わりい神様。大分濡れてきちったな」

「・・・え!？」

「って、おいおい。水が飛び散るから!」

いきなり起き上がったと思ったら、髪を振り回し始めた。
これ、わざとか？

「あ、あなたが変な事いうからでしょっ!？」

「変な事ってなんだ・・・？」

「だ、だからその・・・あれ・・・」

なんかモジモジし始めた。

って、ものすごく今更だけど・・・こいつ可愛いのかな。

俺の仕事仲間より可愛いかもしれない。

髪の毛はヒジョ〜〜に残念な事になってるけど、顔だけ見ればかなり点数高いかも。

「俺はタダ、顔に乗せてたタオルをかなり濡らしちゃったなと思っただけなんだけど？」

「そっち!？」

「そっちってどっちだよ!」

もちろん違っほうに聞こえるように言っただから、ある意味彼女は正解なんだけどね。

「えと、あの・・・なるべく濡らさないように気をつけてくださ

い．．．。」

なんかもう、ただのシャンプーなのに白髪が増えてるんじゃないかってくらい燃え尽きてる。根性が足りないなあ。

「了解。とりあえずサッサと洗うから寝ろよ」

「ああもう。めちゃくちゃすぎだよこの人．．．。」

シャンプーくらいは適当にやってもある程度大丈夫だけど、カラーどうすっかなあ。

勝手にやったら怒られそうだけど、今更止めるのも勿体無いし。楽しむだけ楽しめたらいいか。

「んじゃ、適当に乾かすよ」

「適当って．．．もう好きにしてください」

「ダメですよ神様。若いんだし、そんなすぐに諦めちゃ」

「口より手を動かしてくださいね」

さすがに疲れたのか、あんまり突っ掛かってこない。少し休憩させてやるか。

「先にマッサージしてやるよ」

こうみえてマッサージはかなり得意。資格持つてのって良く言われるし、マッサージ上手いのって意外

と得することもある。

マッサージしながら少しずつエロい方向に持っていくと、あんまり抵抗されないでやれたりするし。

ストリートな表現が好きじゃない女とかにはマッサージをするってのを口実に誘うと、結構乗っかってきてくれたりする。

あ、ちなみに今はやんねーよ？この状況はさすがに問題アリだろ。

「なんか、すげえ肩凝ってるけど。何の仕事してんの？」

「昔から肩凝りひどいんだ……。てゆーか、マッサージ上手だね」

「だろ？良く言われる。んで、仕事は？」

「仕事ってゆーか、今は大学生だよ」

確かに言われてみれば、仕事をしてるって雰囲気じゃないな。

適当にバイトしながら大学に通ってるって感じ。

別に大学生って聞いたからそう感じたわけじゃないぞ？

「大学かぁ。大学って楽しい？」

「大学行ってないんですね。楽しいと言えば楽しいけど。めんどくさい事も多いよ」

なんか微妙に違和感がある話し方だな。

どこがって言われるとハッキリわかんないけど、なーんか変な感じがする。

「サークルとかは凄く楽しいよ。皆イイ人ばかりだし、色々構ってくれるから」

「サークルねえ……。何のサークルに入ってるの？」

「実は。バンドやってるんだっ」

ちよつと恥ずかしそうに、でもそれが私の大好きな事なんだって感じの笑顔で教えてくれた。

その笑顔はとても楽しそうで、幸せそうで、眩しくて。
俺は

「ああ、あの頭につけるやつだろ？」

いつも通りに軽口を叩く。
目を逸らしながら。

「違いますよつ。音楽の方です。確かに頭に付ける物もありますけど、楽器弾いたり歌ったりのアレです！」
ヘッドフォン

「ソレ、上手いこと繋がたつもりなんだろうけど、全然上手くないから」

「あ、やっぱり？」

少し前まではあんなに怒っていたのに、今じゃ笑顔以外を知らないつてくらい笑っている。

営業スマイルとかじゃなくて、心からの笑顔ってわかる。
本当に生きてて楽しいんだなって、俺もそんな風になりたいって。
そんな風に思わせる笑顔だった。

「そろそろマツサージ終わりな。頭乾かさないと」

「あ、はい。マツサージ気持ちよかったです」

違和感の正体はコレか。

敬語とタメ口が混ざってるんだ。

わざと使い分けてる感じでもないし、元々そうゆう人なんだろう。

「今のマツサージは別料金貰うから」

「えっ!?!・・・一瞬でも感謝した私がバカだった」

「冗談だよ、ほら前向け前。ちゃんと乾かしてやつから」

彼女が落ち着けるように、髪を手に取り少しずつ丁寧に乾かしている。

長さはミディアムくらいで、パーマをかけているのか軽くウェーブしている。

正直に言えば、こんな感じの子はそこら中にいる。いわゆる流行のつてやつ。

でも、似たような髪形が多いからこそ、素材の差がはっきりと出てくるんだよな。

髪の毛は毎日手入れをしているのか、凄くキレイで。ドライヤーで水分を飛ばす度に、手からサラサラとこぼれていく。

「髪、キレイだな」

気付いたらそう呟いていた。

けれど、俺の声は彼女に届かなかったようだ。きっと幸せな夢でもみているんだろう。

時折見せる幸せそうな寝顔を眺めつつ、もう完全に乾いた髪を撫でながら、その寝顔に見入っていた。

俺って何様？

「んで、君たちは人の店でいったい何をしていたのかな？」

神様と二人で寝ている所をこの人に見つかってしまった訳で……。当然ながら勝手に色々やったのもバレてる訳で……。

その流れで行ったら怒られるのは確実な訳で……。

「何って、寝てたに決まってるじゃん。見りゃわかんだろ？」

どうせ怒られるなら開き直ってみようと思った訳で……。

「はいそこ、開き直らない。どうして反省の色がかけらも見えないのかな」

もちろん、反省なんてしてない訳で……。ってコレもういいか。

「確かに俺も寝ていたかもしれない。だが、先にこいつが寝たから仕方なく俺も寝たと言う事実がある！よって俺は被害者だ！」

「いや、もう訳わかんないよ……」

もうコイツには何を言っても無駄だ的な諦めを含めた視線を送ってくるのは、何を隠そう加害者の神様だ。

早くも俺とゆー存在になれてしまったのか、最初の時のようなステキなりアクションをしてくれなくなった。残念。

「でも、貴女も貴女ですよ？このバカと一緒に居る時点でそれなりの被害を被る事はわかるでしょう？もう少し人を見る目を養いなさ

い」

「そうだ、もつと養え！」

「君は黙ってなさい」

なんで俺ばかりこんなに攻められるんだろう。

「世の中ってって世知辛いなあ」

思わず呟いた言葉もスルー。

あ、なんか泣きそう。

「とりあえず、君達にはきちんと掃除をしてから帰って貰いますからね」

その言葉にチラッと店内を見回すと、なるほど。

どうやらシャンプー時に神様が飛ばした水が鏡やら何やらにまで飛んで微妙な感じになっている。

でもこれ、俺がやったんじゃないしなあ。

とゆーことで俺が取るべき行動は一つ。

「ああ。これ。こいつがやりました。俺は何もヤツテマセン」

「なっ・・・!?!」

ずばり事実を言われて何も言い返せないのか、神様は口をパクパクさせて俺を見ている。

それってなに、金魚の真似?どうよこれって感じで俺に見せ付けてるわけ?

まあ、結構うまいよ。うん。

「・・・ねえ、もう少し付き合う相手は選んだほうがいいよ?」

盛大に勘違いをしてらっしゃる。

その言葉にも特に反応せず、いまだに金魚の真似をしている神様。もちろん俺は否定しない。だってそのほうが色々面白くなりそうだし。

「とりあえず拭くだけでいいから、ちゃんとやっておいでね。私は二階にいるから・・・悪さしないでよ?」

「へいへい。わあったよ。適当に吹いて適当に帰るわ」

適当って言葉に眉をピクつとさせたけど、何も言わずに二階へ上がっていった。

めんどくさいけど、自分の蒔いた種って奴か。

「で、なんで被害者の私まで手伝わなくちゃいけないのかな?」

白くてキレイなコメカミに青筋をたてなはら、笑顔できいてくる。人間の一番怖い顔って笑顔なんだなあとシミジミ思いつつ、お前が水を撒き散らしたのが悪いと言って無理やり手伝わせる。

「そもそも、あれはアナタが変な事言うからだよね?」

「変な事って？俺なんか言ってたっけ」

「だ、だから・・・濡れてるとか紛らわしいこと言うからっ」

「ああ・・・だって実際に感じて濡らしてただろ？」

今度は直球で行ってみた。

意外と下ネタいけるんじゃないかなーなんて。

「・・・あ、もしもし？警察ですか？」

「って、ちょっとまてーい！」

ベン・ジョンソンも真つ青のダッシュを披露しつつ携帯を奪取。
今のダジャレ結構うまかった、さすが俺。

「いやおまえ、マヂでサツにかけてんじゃん！」

「当たり前だよ。こんな変態はさっさと捕まえて貰わなきゃ、安心して外歩けないし」

うわー、目がマヂっす。

「いいから携帯返してよ」

「断る！返したらまたサツにかけるだろうが」

「当然。今日会ったばかりの人相手に濡れてるとか・・・エッチ」

「男は皆エロなのだよ。これはもう世界で認識されている事実だ！」

「いや、そこ胸張れるトコじゃないと思うよ」

呆れるを通り越して面白くなったのか、軽く笑ってる。
たぶん俺よりもこいつは変なんだと思う。

俺に騙されていた事すら忘れたのか、それとも気にしていないのか。
本当なら怒って帰ってるはずなのに、こうやって手伝いまでしてくれて、更には俺に笑いかけてくれる。

瞬間的に怒ったり（怒らせたり）はするけど、後に響かないっていうか、別の事に興味が移ったら怒ってた事すら忘れてしまう。
その一瞬を楽しむ、そんな姿勢で生きているんだろう。

「なあ、神様。結局カラーしてないけど、どうすんの？」

「あ・・・忘れてた」

このまま帰したら、本当にただの被害者になってしまう。

店員でもない男に騙されてオモチャにされて、最後は掃除までするハメに。

「さすがに、このまま帰すのは気が引けるからさ。ちょっと待ってる、カラーしてくれるように頼んでくるから」

ベン・ジョンソンも真っ青のダッ（中略）を披露しつつ階段に足をかけたとき、教えてないはずの名前を呼ばれた気がした。

振り向いた時に見えた彼女の顔はとても真剣で、目を逸らす事が出来なかった。

少しずつ近づいてくる。一步一步ゆっくりと。

「一つだけ、訊いてもいいですか？」

ゆつくりと、決して大きくは無い声で。

でも不思議とハッキリと耳まで届いてくる。

地球に比べたら本当に小さな小さな俺の身体（世界）は、きっとこの時、神様に支配されてしまったんだと思う。

俺って軟派？

「なあ、ちよつとでいいから付き合ってくんね？」

「やだよ、なんで俺がわざわざそんなことしなきゃいけないんだよ」

「今回ばかりは一人じゃきついんだって。頼む！一生の御願い！」

「おまえ、その一生の御願いって後何回使う気だよ」

「んゝ・・・50回くらい？」

まじで死んだらいいのに。

周りを見回すと大半がカップルで、ちらほら女の二人組がいる。

最近出来たペア専用のアミューズメントパークらしい。

すべての乗り物やゲームがペア専用で、一人でも三人以上でも何も出来ないようになってる。

何も聞かされずに連れて来られて御願いされたのが

「結構女の二人組が多いから、声かけたいんだけど一人で声かけても場所が場所だし微妙じゃん？つうわけでナンパに付き合ってくれ」

入場料払った後に言うとか反則じゃね？

ものすっごい嫌な顔しながらも渋々了承してやった。

ありがたきおもえよコノヤロウ。

「んで、どこらへんがねらい目？」

「今悩んでるトコ。顔だけじゃなくて胸も欲しいし・・・そうなつてくると結構絞れてくるんだよな」

「はいはい、どうでもいいからさっさと決めてくれ」

俺としてはさっさと終わらせて遊びまわりたいんだよ。そんな俺の気持ちをよそに悩みに悩みまくるアホが一匹。

「どうせ一回やって終わりなんだろう？ だったら適当でいいんじゃないのかよ」

「いやいや、わかってないねオニサン。数も大事だけど、質も大事なんすよ」

ああもう俺のこの遊びたい気持ちが届かない。
折角の休日がドンドン無駄に浪費されていくよ。

こんなことなら行きつけの服屋行って冬物でも買い漁ってるほうが全然楽しいじゃんか。

「そーいや、今何人くらいいてんの？」

「今日も含めて64人くらいかな。やっと後半戦開始ってところ」

さすが百人斬りを目指してるだけあってそこそこ順調。
今日もやれるって決め付けてるとこは突っ込むべきか否か、迷うところだ。

「よし決めた。あの二人組にしようぜ」

マサキが指差す先には、なるほど。確かに可愛いしスタイルもいい。

ファッションもマサキ好みのギャル系だけどちょっと落ち着きもある雰囲気で、最近良く見る所謂流行ってやつ。

「俺は何役？」

さつさと女の子に向かっていくマサキに一応訊いとく。

もしかしたらステキな作戦を考えているのかもしれないからな。

「シヨウはいつも通りでよろしく。その方が俺も合わせやすいし、前みたいにイミフな紳士キャラになられても困るからさ」

あの紳士キャラは相当嫌だったんだろう。

その時は紳士的に振る舞いすぎて逆に女の子の誘いを断ってしまったくらいだからな。

「こんちわっつ。良かったら俺ら含めて四人で遊ばない？」

いや、早いから。

俺まだ追いついてねーし。

「人数が倍になった分だけ楽しさも倍になるって！むしろこんな可愛い子と遊べたら倍どころじゃすまないかも！」

やっと思いついた頃にはマサキは絶好調。

それに引き換え相手の子達はものすごく冷めた目でマサキを見つめている。

・・・無視されてないだけマシか。

「四人って言われても、ペアじゃないと遊べないのばかりじゃないですか」

副音声にはきつと、私達は二人で楽しむからアンタらはどっか行つて。とか入ってるんだろう。

残念ながら、このアホは言葉通りにしか受け取らないんだけど。と言つ訳で・・・マサキのターン！

「大丈夫！一つの席に二人で座れば四人でも楽しめるよ！」

あ、予想以上のアホ加減に女の子もメンドクサって感じの目になってる。

俺が逆の立場なら間違いなく言葉にしてるね。めんどくさって。

「おい、シヨウも何か言えよ」

俺のターン！

「心配しなくても大丈夫だよ。こいつの上に俺が座って、その子の上に君が座ればいい。」

「そうそう、キレイに男と女に分かれて・・・って気持ちわるうっ！」

「マサキ、お前って・・・ノリツツコミすぎえ下手だったんだな」

ものすごく可哀想な気持ちになって、哀れんでしまった。

「うつせーし」

「お兄さん達さ、こんなトコでナンパしないで芸人でも目指したらっ。」

軽くウケたのか、クスクス笑いながら新しい未来を提示してくれた。
なんて素晴らしい子なんだろうか！

「マサキ、今から俺たちは桂サンマだ」

「え、それってコンビ名？・・・変に混ざってる上に、そもそもそれ師匠と弟子混ぜただけじゃねえか」

この一瞬でそこまで気付くとは、見ない間に腕をあげたもんだ。
実は本気でそっちの道を極めるつもりなんじゃないか？

「ごめん、本気で芸人お勧めするよ」

今度はかなり真剣な目で言われてしまった。
そんなにセンスいいのか俺たち。やばいな。

「ツカミはおっけーってことで、どう？四人で遊ぼうよ。なんなら場所変えても全然いいしさ」

まだイケると思ってるのか、攻めて行くマサキ。
お前が攻めるのなら俺は守らねばならない！

「いや、ダメだ。場所を変えるなんて俺が許さない。いじでもこの場所で遊ぶんだ！」

「いやいや、またイミフなキャラだしてくんなよ。少しシズカちゃんしてて」

そう言うと、反応を返してくれてた女の子と1対1で話し出した。

一人でいいから全力で落とす作戦だな。頑張れマサキ、邪魔くらいならするから。
どうやって邪魔しようか考えてると、もう一人の女の子と目が合った。

「折角遊びにきてるトコごめんな？」

マサキには聞こえないようにそつと囁く。

俺はただの暇潰しでここに居るから、他の人の楽しみを奪ってまでつてのは正直なかった。

だからつまらなそうにしてるこの子には少なからず謝るべきかなと思っただけです。

ナンパ中にこんな事言う奴が珍しいのか、じつと俺の顔をみてくる。負けじと俺も見つめ返す。

「もういいから、そろそろ諦めてよ」

「そんなツンデレなところも可愛いね！この後はどこに行きたい？」

マサキ、残念ながらデレがないぞデレが。今のトコその子はツンツンだ。

「ねえヒナ、こんなの無視して行こ」

マサキの事は完全に無視して俺と目が会ってる（ヒナと呼ばれた）子の手を引いてその場を去ろうとする。

・・・が、何故かヒナって子は全く動かない。

「ヒナ？どうしたの？こんなトコにいたら食べられちゃうよ」

ずいぶんな事を言われてるよ俺たち。

マサキは否定できないだろうけど、俺はそんな気ないってのに。
俺は草食系なんだから！いやうそですごめんなさい。

「ほら、行こうよ！」

「大丈夫ですよ」

俺から目を離し、強引に連れて行こうとする友達に視線を移した。

「そっちの人はともかく、この人はそんな事する人じゃないですか
ら」

その言葉に他三名は固まる。

そしてもう一度、俺の顔に何を考えてるのか判らない目を向けてくる

「ちょっとヒナ、どうゆうこと？」

「この人・・・ショウ君は知ってる人ですから」

その言葉に一番疑問を抱いたのは他の誰でもなく、俺だった。

俺って健忘症？

「なあ、知り合いってどうゆうことだよ？」

「いや、俺に訊かれても」

いやマジ訊かれても困るし。

「だってあのヒナちゃんだっけ？が言ってただろ」

確かにあの子は俺を知ってる人だって言った。
でも残念な事に俺の記憶には全く残ってない。
忘れてるだけだとしたら、あの時の会話で多少なりとも思い出してるはずだし、向こうの勘違いじゃないのかなと。

「まあいいよ。おかげであの子達のアドレスゲットできたし。早速今夜にでも誘っちゃおうかな」

「昼間っからエロ全開だなお前」

ってか、全然良くないだろ。勝手に一人で完結させやがって
と言っても考えても答えなんてでないし、もう疲れたから帰る。

「おい、どこ行くんだよ？」

「お前の目的は達成出来たろ？俺もう疲れたから帰るわ」

まだまだこれから勝負だとか言い出すマサキをガン無視してさっさと出口に向かう。

比較的街中に作られているから帰るのにもそんなに時間はかからない。

徒歩と電車合わせて40分くらいかな。

ポーっとしながら歩いてると駅が見えてきた。

そこで颯爽と携帯を取り出す俺。

ふふん、なんと携帯一つで電車に乗れちゃうんだなこれが。科学って凄い。

って、あれ？メールきてる。

メールついてまいち好きじゃないんだよな。電話のが早いしメールってなんか縛られてる感じがする。

んで、どなたさんですか？と・・・ヒナ？

さっき別れたばっかじゃん、どんだけ積極的なんだよ。

メールには二人で話したい事があるってのと待ち合わせ場所が書いてあった。

ちよつと色々急展開すぎやしないか？

俺の穏やかでつまらない日常はどこへいったんだよ。

てか、今更だけどさ・・・ここで待ち合わせってどうなんだよ？

現在地、渋谷駅八チ公口。

今時こんな人覆いトコで待ち合わせしようって奴いるんだな。俺なら間違いなく指定しない。

ナンパ・キャッチ・スカウトどれも多くてうんざりする。

ここを選ぶなら信号渡った先にあるTATUYAの入口で待ち合わせた方がいいと思うんだけど。

「人が多いおかげで変なもの多いし、退屈しないのはイイけどさ」

なんて一人で呟いてる俺も十分変な人になるんだろうか。

ちよっと困ってるのがヒナの容姿をろくに覚えてない事だ。

覚えているのが、

背小さい・可愛い・胸でかい

我ながらもうちよい覚えとけよって思うくらいはつきりと覚えてない。

後は・・・髪の毛長いつてくらい？

まあきつと向こうが見つけてくれるだろ。なんて楽観的にしててもいいよな。

もしかしたら見つけられるかもなんてキョロキョロ。

ああ、ごめんよお姉さん、邪魔だからって舌打ちなんてしないでくれたまえ。

邪魔にならないように、数歩後ろに下がって壁際に移動・・・出来なかった。

「大胆だな、会った初日に後ろから抱きつくなんて」

後ろを振り返ると、鼻と後頭部（恐らく壁にぶつけた）をさすりながら見上げてくるヒナがいた。

「脅かそうとしたら、予想外の反撃をうけました」

そんなに激しくぶつかったつもりはないんだけど、涙目で言われたらさすがに申し訳なくなってくる。

「わりい、気付かなかった。ごめんな」

手のひらからごめんな、元気出せと念を込めて頭を撫でてやる。

「一応グシャグシャにしないように気使ってますよ？」

「大丈夫ですから」

即効で手をどけられた。

グシャグシャにはしてないぞ。

「頭触られるの嫌いだったか？」

よくよく考えれば今日会ったばかりだし、少なからず抵抗があったんだろう。

今日はちよつと軽率な行動が多い気がするな・・・っていつもか。

「恥ずかしかっただけです。イヤじゃないですから、そんな顔しないでください」

俺の言葉にゆっくりと顔を横に振ると、良く判らない事を言われてしまった。

「そんな顔って、どんな顔？」

いたっていつも通りのクールでステキな顔をしているつもりなんだけど。

もしかして気付かない間に変顔しちゃってた？やばいよそれ、こんな人多いところで。さすがに恥ずかしさで死んじゃうって！

「なんか、不安でいっぱいって顔してました」

「いやさすがにソレはない。」

「ってか一体どこに不安になるような要素があったんですか。」

「ちなみにさ、視力いくつ？」

「コンタクト入れて両目共に1・0くらいです」

目が悪いからって話でもなさそうだな。

どうせそう見えただけで実際ってわけじゃないんだろ。

「さて本題。話って何？」

こんなところでダラダラ話しても仕方ないし、さっさと話し終わらせて帰りたい。

・・・帰っても何もすることないんだけどね。

「ここで話すのはちょっと……。近くに良いカフェがあるので、そちらへ行きませんか？」

もったいぶるねえ……。

まあどうせ話すなら落ち着ける場所のがいいしな。

「別にいいけど、迷子になるなよ？」

「それは私の台詞ですよ、お兄さん」

俺の台詞で合ってるつつうの。

って言い返すつもりだったんだけど、さっさと一人で歩いて行く背中を見てあながち間違ってたのかも、なんて感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3655i/>

俺（私）の小さな世界

2010年10月28日04時41分発行